

大阪から世界にアートの新しい潮流を。

池田 知隆（ジャーナリスト、大阪自由大学理事長）

「ヨシモト、たこ焼き、タイガース」——大阪の文化がそう揶揄され始めたのはいつからだろう。大阪の経済的な地盤沈下を嘆きながら、「笑い」と「粉もん」と「アンチ（中央）」によって市民もまた、自己満足しているかのようである。さながら街中から芸術、文化の香りが薄れていくようにも感じられるが、いま、その大阪の歴史が育んできた豊かな精神的土壤を見つめ直すときかもしれない。

難波宮の昔や、上方文化の栄華を極めた江戸期は言うに及ばず、明治期になっても都市大阪には独特的文化的風土が息づいていた。あまり知られていないが、大阪市の初代市長、田村太兵衛（1850～1922）は美術品のコレクター、古美術鑑定家で、後に大阪博物長を務めている。商人出身とはいえ、初代市長が美術愛好家で茶人として風流を好んだというのだから、歴史はおもしろい。（20世紀日本人名事典）

大阪市制が施行されたのは1889（明治22）年。明治新政府が設置した大阪府が大坂三郷（現在の中央区・北区・西区周辺）を大阪市として管轄し、当時の大阪市は東京市、京都市と同じように府知事が市長の職務を代行する「市制特例」となっていた。政府がいわば、任命した知事を通して3都市を直接に支配していたのだ。

1998（明治31）年、「市制特例」が廃止され、大阪市は府から独立。市会で豪商・住友家の第15代住友吉左衛門（友純）を僅差で抑え、初代市長に就任したのが田村だった。田村は心斎橋で丸亀屋呉服店を営んでいたが、市長就任後、市庁舎を新設し、現在の大阪市立大学につながる大阪高等商業学校も創設した。

田村は市長になるとき、自らの呉服店を「たかしまや飯田新七

呉服店」（現在の高島屋）に番頭ごと譲渡し、高島屋が京都から大阪に進出を果たした。さらに高島屋が所蔵の日本画などを「現代名家百幅画会」として公開したところ、購入希望が多く、美術工芸品を扱う高島屋美術部の創設につながっていく。有力な画家が住む京都ではなく、大阪に美術部が置かれたのは興味深い。1914(大正3)年には院展（日本美術院）再興第1回展が高島屋大阪店で開かれ、横山大観ら当代一流の画家たちの作品を展観した。大阪の百貨店は、市民に有名画家の作品を身近に鑑賞できる美術館のような役割も果たした。

それから時が流れ、大阪市制100年を迎える記念事業の一つとして1983（昭和53）年、近代美術館建設構想が打ち出される。大阪の実業家で美術蒐集家、山本發次郎（1886～1951）のコレクションが、彼の子息から大阪市に寄贈されたのがきっかけだ。大阪が生んだ天才画家、佐伯祐三（1898～1928）の油彩画にほれこんでいた山本は、僧の墨蹟、中国の石彫、中国朝鮮の陶磁から東南アジアの染織、浮世絵、近代絵画や彫刻なども収集。戦時中、それらのコレクションの疎開を行ったものの、空襲で収集作品の8割は灰となり、失われた。それでも、寄贈された美術品は約580点を数える。

近代日本の美術史は、フェノロサ・岡倉天心に始まる東京美術学校（東京藝術大学）を中心に形成されてきた。しかし、それとは異なる文脈で大阪の美術というものがある。江戸期から多くの大阪の商人たちは美術品を収集し、芸術に造詣の深い商人も少なくなかった。中国の影響を受けた文人画は大阪がその中心地のひとつだった。商人の間では習い事が盛んで、楽しみながらさまざまなアートを生み出してきたのだ。

大阪市北区中津の浄土真宗の寺に生まれた佐伯祐三。旧制北野中学（現・北野高校）、東京美術学校（現・東京藝術大）で絵を学んでパリに渡り、出会った野獸派の巨匠、ヴィラマンクに作品を

見せた途端、「このアカデミックめ！」と罵倒された話はよく知られている。その後、画風を一変し、30歳の若さで亡くなるまで驚異的なペースで絵を描き続ける。アカデミックな作風よりも個性を重視する大阪精神が、佐伯のどこかに息づいていたのかもしれない。

戦後、具体美術をリードした吉原治良（1905～1972）は油問屋（後の吉原製油）に生まれた。作品が売れることなど考えず、自分がやりたいことをやり、最先端の前衛作品を多く生み出した。具体的なメンバーで美大へ行ったのは2、3人で、吉原治良はじめ独学の作家が多い。それでも世界的な美術家になれるという自負が大阪の作家たちにはあった。

しかし、いつしか大阪からアーティストを育くむ気風が失われていったのか、「大阪は住むにはいいが、芸術活動するには向いていない地だ」と、佐伯より11歳年長の大阪の画家、小出櫛重（1887～1931）は言っている。佐伯もパリから一時帰国したとき、大阪には戻らなかった。フランスに戻るまでの4年余、東京・新宿にアトリエ付き住宅を新築し、そこで創作活動している。そのアトリエは、新宿に残る大切な「土地の記憶」、「まちの記憶」として保存・継承し、広く発信するために新宿区立佐伯祐三アトリエ記念館として整備、公開されている。それに比べて郷里・大阪での佐伯の痕跡は、生家の寺に「生誕之地」を伝える石碑があるだけだ。

「大阪には近代美術館がないから、死後、作品を収めるところがない」。大阪出身のアーティストからそんな嘆きも聞かれるようになった。日本各地にユニークな公的美術館が相次いで開館されたが、大阪には近代美術館だけでなく、大規模な展覧会を開く会場もなかった。

そして、やっと大阪中之島美術館が2022年2月、水都大阪のシンボル、中之島に開館する。近代美術館建設構想が示されてから39年、設立準備室が設置されてから31年余になる。バブル崩壊や

市の財政難、橋下市政のゼロからの見直し……など時代の嵐を乗り越え、市民待望の新しい文化的拠点が誕生する。佐伯祐三らの絵画や具体美術を含む膨大なコレクションが収蔵され、すべて落ち着くところに落ち着いた。今後、ここ大阪から世界にどんなアートの潮流が生まれていくだろうか。芸術、文化を愛する都市として大阪の魅力が高まることを期待したい。